

ホームステイで異国文化を体験

ザ・フレンドシップ・フォー・オプ・クマモト

昭和五十二年、ジミー・カーター元米大統領の提唱により発足した「ザ・フレンドシップ・フォー」は、世界四十二カ国二百三十以上の地域に会員を持つ国際交流のボランティア団体です。会員同士がホームステイを通してお互いの国を行き来し、家族の一員として共に生活することによって相互理解を深める活動を行っています。

昭和五十九年、熊本クラブは九州で初めて活動を開始したリーダー的存在。一昨年は、第十回アジア会議が熊本で開催されました。活動にあたる二週間の滞在期間の費用は、飛行運賃以外のほとんどを受入れ家庭で負担します。滞在中の生活プランは、例えば医師の参加者には、病院見学を盛り込むなど、渡航者の興味・希望に応じて柔軟な対応を心掛けています。行政からの依頼で研修生を受入れることもあるとか。ホストファミリーとの生活の中で、異国の文化に触れることができます。



こたつに入って気軽に国際交流

「ありのままの日本を知ってもらうには、家族の一員としてありのままの生活をしようことです」と事務局の広瀬和彦さん。広瀬さんもステイ先で、料理の腕を振るったり、現地のボランティア活動に参加したり…。共通体験をすることで言葉の壁を越えて友情が深まります。

現在、会員は百三十家庭。「会員を県内全域に広げていきたいですね」。国際交流は我が家の中にもあります。

越えて送られています。

フィリピンのスラム街に古着を

王栄幼稚園・国際交流委員会

創立百二年になる熊本市九品寺の王栄幼稚園は、発展途上国へ古着を送り続けて十八年目。もともと熊本大学のボランティアグループが古着を送る活動を行っており、同園は整理場を提供していました。しかし、彼らが卒業した後、一度根付いた善意は途絶えることを知らず、その意思を引き継いで現在に。その四年目からは特に貧困の厳しいフィリピンのカビテ地区に送られるようになりました。

これまでにダンボール箱で千五百箱以上、二十トントン近くの古着が集まりました。一年に三〜四回、集められた古着は、園児の母親や教会婦人部の約四十人のボランティアによって仕分けが行われます。

国内の運搬は、県内の運輸会社の善意。平成六年からは、医薬治療を受けることのできない子供たちのために、市内の薬品会社から寄せられたビタミン剤も一緒に送られるようになりました。

また、学校に行けないストリートチルドレンのために、学びの場を作

ろうという活動にも参加しています。

「王栄幼稚園・マニラ教育基金」をマニラのバンクに積み立て、現地で働く教育者の給与を捻出しています。

これら発送費用の主なよりどころは、教会で結婚式が行われる際の収入となる「特別献金」や毎年十月に行われるバザー活動と善意コンサートです。同園は県下でもバザー活動の草分け的存在。毎回衣類を中心にたくさん善意が寄せられ、留学生たちにも提供されています。

「海外からこれまで受けていた恩恵を返していくことで、今やつと真の交流が始まったと思います」。粟津安和園長の発信する善意は、海を

たくさんの古着にたくさんの善意が込められています



肩の凝らない等身大の国際交流を

いつわ国際交流協会

「留学生はお客扱い、外国人労働者には厳しい。上下関係のある国際交流はおかしいと思います」と川口典子さん。川口さんは一昨年、天草郡五和町で、いつわ国際交流協会を発足させました。

きっかけは、雲仙普賢岳罹災者とペルーの子どものための支援を目的としたチャリティコンサートを主催したこと。翌年には、ザイルからの留学生や元青年海外協力隊員を呼んで、「アフリカ イン イツワ」

を開催。なじみのうすいザイルやニジエルの地理や生活ぶりを聞きました。「まず相手のことを知って友達になる。友達が困っていたら助けたいと思うのが自然だと思うのです」。国際交流から協力へと活動の幅を広げていきたいと川口さん。

チャリティコンサート、英会話茶話会、スペイン語教室、インド人によるカレー料理教室など、二年目の今年の行事も身近にできることから始まります。会員は約四十名、うち

十名は子どもたち。肩の凝らない国際交流が身上了。イベントで知り合った外国人を英会話講師として招くなど、知り合いから「知り合い」でネットワークを作り、交流会も我が家で家庭料理でもてなしたり…。

五和町は、鳥原の乱の遺跡やキリシタンの墓が多く残る町です。スペイン留学経験のある川口さんは、「五和町とスペインの接点を見つけ、それをきっかけに町おこしでもやっていきたい」と、夢は大きく膨らんでいます。

交流協会発足のきっかけとなった「プカソコチャリティコンサート」



日用品リサイクルで留学生を応援

熊本YWCA国際部「留学生の会」

茶ダンス一三百円、自転車一千元、冷蔵庫一千元。ちよつと古いけどまだまだ使える。そんなものが所狭しと並んでいます。熊本市黒髪にある「留学生・リサイクルセンター」は第一土曜が店開き。留学生のお客さんで長蛇の列ができます。

日本へやって来る留学生たちにとって、物価高の日本での生活は大変。生活用品をリサイクルし、留学生の生活を援助しようと開設されたのが

同センター。運営しているのが、熊本YWCA国際部「留学生の会」です。活動しているのは三〇〜五〇歳代の女性の十人〜十五人。「若いボランティアが少ないのが残念」と代表の常葉俊子さん。しかし、若い夫婦にベビー用品を揃えてあげたり、産院を世話したり。経験者だからできる世話もいっぱいあります。「若い妊婦さんが、私の顔を見るなり泣き出してしまつて…。きつと心細かつ



自転車、ラジオなどが人気商品とか

たんですね」生活物資、言葉の問題、アルバイトのこと、顔なじみになるにつれ留学生からの相談も増えていきます。同センターは留学生の交流の場でもあり、心のよりどころともなっています。「助かります」の一言が何よりうれしい。常葉さんたちは、留学生たちの「お母さん」かもしれせん。

同会ではこの他、留学生と常に連絡を取り合い、日本での家族となつてくれるホストファミリーを紹介したり、在熊外国人を対象とした日本語教育も行っています。